

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4290201120		
法人名	有限会社 RAIMU		
事業所名	グループホームほほえみ	ユニット名	そら
所在地	長崎県佐世保市萩坂町1750-1		
自己評価作成日	2022年2月13日	評価結果市町村受理日	2022年3月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/42/index.php?action_kouhyou_pref_topjigovsyo_index=true
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般財団法人 福祉サービス評価機構		
所在地	福岡市中央区薬院4-3-7 フローア薬院2F		
訪問調査日	2022年3月14日	評価確定日	2022年3月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症介護指導者である法人代表を中心に「自分が入居したい施設」を目指し、ケアを行っています。法人の理念である「らしく いきよう むげんに」をモットーにその人が最後までその人らしく暮らせるよう、協力医療機関や地域の方々にご協力頂きながら生活して頂いています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「グループホームほほえみ」は佐世保市萩坂町にある。法人代表(社長)と2人の管理者は、職員個々のコロナ禍の不安やストレスに向き合うと共に、日々やりがいを持って働けるような職場環境の整備を続けてこられた。社長の真意である「介護の現場に来てくれるだけで感謝」を職員と共有し、介護の中での「疲弊感」「余裕の無さ」を少しでも軽減できる取組みを検討している。職員一人ひとりの生活環境や体調等に配慮し、無理の無い範囲で勤務できるよう職員と個別に相談したり、新しく入職した職員も、管理者や先輩職員に気軽に相談できる職場環境になっており、「仕事にやりがいを感じる」「仕事が楽しい」と言う言葉が職員からも聞かれていた。コロナ禍においても変わらず、入居者の方々の楽しみが増えるよう、社長は職員へのアドバイスを続けてこられ、全職員と家族の方々から協力して「今しかできない事」の実践に繋げることができている。徒歩圏内にある協力医療機関との連携も継続し、医師、訪問看護師、理学療法士、言語聴覚士等と協力して、入居者の方々の健康管理が行われている。入居者の方々の思いに共感し、ご本人の有する能力を引き出し、プランターでの野菜作りや干し柿作り、包丁を使っての下ごしらえ、食器洗いなどをして頂いたり、感染対策を行いながら、散歩なども楽しませている。今後も引き続き、コロナ禍における更なる地域交流の方法を検討していく予定である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目№.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通い場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている ○ 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが ○ 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が ○ 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ケアを行う際「自分がケアをされる側だったらどう思うか」を常に想像し、できるだけ自由に過ごしていただけるようケアの実践をしている。	「らしく いきよう むげんに」という理念を大切にされている。「その人らしさを大切にし、生きがいを持って生活が送れるよう、継続して支援を行います」という具体的な実践内容も作られている。入居者の方々の生活歴を把握し、培ってこられた事を発揮して頂くと共に、「家族に会いたい」「家に帰りたい」という要望を引き出し、家族と協力して叶えるように努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の民生委員などに、広報誌をお渡しし、ホームの様子を伝えたりしているが、日常的な交流はできていない。	住民の結束が強い地域であり、コロナ以前は夏越祭り、地区運動会、敬老会等に参加していた。酒蔵の蔵開きは再開しているが、コロナ禍は中に入らず、近くで雰囲気を楽しまれている。日々の散歩の時に地域の方にご挨拶したり、中学校の職場体験発表会に招待して頂いていた。高校生と専門学校生の実習(PCR済み)受け入れもしており、中学校で介護の体験談の講話を行うこともできた。	今後も近くにある幼稚園児との交流方法を検討していくなど、コロナ禍においても、更なる地域交流の機会を増やしていきたいと考えている。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月行っている職員勉強会の資料を、地域の方にお配りした。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	書面会議が続いているが、勉強会の資料や広報誌を一緒にお送りして、ホームでの活動が少しでも多く伝わるよう工夫している。頂いた意見を職員にも伝えている。	コロナ以前は入居者の状況や職員の人員体制、日々の取り組みや行事等を報告し、参加者の方から地域情報等を教えて頂いていた。コロナ禍は書面会議になっており、感染症対策に関する意見交換、情報交換を行い、感染症対策に役立てており、励ましの言葉も頂いている。今後も参加者の方から地元歴史や習わし等を教えて頂き、日々の楽しみ企画に盛り込んでいく予定である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の担当職員と顔なじみの関係を作り、相談しやすい環境を作れている。	他の自治体の入居の受け入れを含め、管理者が市に報告相談しており、今後も更なる協力体制を築いていく予定である。社長は県の役職(人材確保、介護福祉士会会長など)を務め、地域支援推進員、認知症介護指導者として長崎県下の地域包括会議等でアドバイスしたり、県や市の依頼を受け、講師として認知症の講習などに協力している。	

6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の勉強会を開催し、学びを深めている。また、「自分がされたらどう思うか？」を常に考え、ケアに取り組んでいる。	ホーム単独で身体拘束虐待防止委員会(4回)を開催している。職員アンケート(毎年)も行い、日々のケアの振り返りを続けている。「介護に適した接遇でスピーチロックをなくそう」等の勉強会や不適切ケアの事例検討会も行われ、職員自身が自分の言動を反省する機会が増えるなど、着実に成果が見られている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	委員会や勉強会を開催し、学びを深めている。職員がお互い注意し合える環境づくりについて話し合い、虐待防止に努めている。		
自己	外部		自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護についての勉強会を開催し、学びを深めている。また、外部の研修にも参加し、伝達研修も行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居契約の際は、契約書の説明を時間をかけて行っている。また、分からないことや不安なことはいつでも訊ねていただけるよう、説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	入居者様やご家族と信頼関係を築き、意見や要望を言いやすい環境を作っている。入居者様の安全も守りつつ、ご家族の想いもできるだけ叶えられるよう、代表に確認しながらケアを行っている。	コロナ禍、面会方法の検討を続けてこられた。感染状況に応じて玄関での面会や窓越しの面会、電話での情報交換も行われ、広報誌(ほほえみ通信)と手紙、面会時に日々の暮らしぶりや健康面を報告し、要望を伺っている。「リハビリをさせて欲しい」などの要望を頂き、医師と相談しながら外来者が少ない時間帯にリハビリに行ける体制も整えた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	法人代表が頻回に施設に来て、職員と話す機会を作っている。	法人代表(社長)、管理者等に自由に要望や想いを伝えることができる。コロナ対策も日々検討し、職員の不安等に向き合い続けている。社長のアイデアも素晴らしく、入居者の方々の楽しみ(今しかできないこと等)に繋がる企画を考え、職員と家族が結束して実践に繋げている。職員の生活環境や体調等に配慮し、職員と相談しながら勤務表が作られている。	

12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	資格や役職、研修受講などの努力や実績を評価し、やりがいを持って働けるよう環境整備を行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症介護実践者研修やリーダー研修の受講の機会を積極的に作っている。また、講師としての指導も行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表が介護支援専門員協会や介護福祉士の役員を担っている為、管理者にも会員としての役割を持たせ、活発に交流できるよう配慮している。研修に参加する機会を作り、ケアの向上ができるような取り組みを行っている。		
自己	外部		自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の前にご本人との面談を行い、時間をかけて不安や要望などの聞き取りを行っている。不安や要望に対して一つひとつ丁寧に答えるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居の前に、面談や電話でご家族の困りごとや不安、要望などの聞き取りを繰り返し行い、安心して入居していただけるようにしている。また、入居後も電話連絡などを行い、ご本人の状況を伝えるなどしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族だけでなく、担当のケアマネジャーとも連絡を取り、聞き取りを行っている。入居前に法人での会議を開催し、施設入居が適切か、どんな支援が必要かを話し合って入居を決定している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご本人のできること、できないことを見極める為、カンファレンスを行いケアに活かしている。できることはなにか、どのようなサポートをすればできるのかを話し合い、職員とご本人と一緒に取り組んでいる。		

19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員とご家族との関係が良好で、ご家族から「ここに来るのが楽しみ」との言葉をいただくこともある。ご本人とご家族と職員と一緒に楽しく話ができる関係を築けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	感染症の影響で、対面での交流は難しくなる。手紙や電話など、関係を継続して行く努力は行っている。	コロナ以前は地元の祭りや散髪屋に職員がお連れしていた。馴染みの饅頭屋の訪問販売を利用したり、1階のデイで知人との会話を楽しんでいた。コロナ禍も隣のユニットに昔馴染みの方がおられ、楽しくお話をされたり、散歩の時に以前利用していたデイの職員が声をかけて下さる。馴染みの郵便局に家族宛ての手紙を投函したり、病院のリハビリ室で知人の方と再会されている。感染状況に応じて家族とお墓参りに行かれた方もおられる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	仲の良い方同士がソファで隣の席に座って、ご自宅の地域の話に花を咲かせておられる。職員は邪魔にならないよう、言葉かけのタイミングを工夫している。		
自己	外部		自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	ご本人が亡くなられた後、初盆の時にご家族にお手紙を出している。ご家族は大変喜ばれ、お電話をくださる方も多くいらっしゃる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者がすることは入居者様に選んでいただいている。職員は「どちらにしますか?」「どうしますか?」と訊ねるように心掛けている。	職員も一緒に入居者の方々と会話を楽しまれたり、テレビやチラシを見ながら、食べたい物等の要望を聞いている。カンファレンスや申し送り等で把握できた内容を「共有」し、ご本人の真意を職員全員が「共感」できるように努めている。意思疎通が難しい方は、しぐさや表情から思いを察したり、在宅時に利用していたデイサービスの職員や居宅の介護支援専門員から情報を頂いている。「自宅に帰りたい」「家族に会いたい」の願いを家族と一緒に叶えるように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前にご本人、ご家族、担当ケアマネジャー、利用していた介護サービスの職員などから話を聞き把握に努めている。また、入居後にも入居者様との日常会話の中で生活歴などを伺っている。		

25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護記録に一日の過ごし方を記入し、全員が情報共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ご本人にしたいことを尋ねたり、カンファレンスで意見を出し合い介護計画を作成している。	「在宅復帰および在宅支援の検討シート」があり、入居時から在宅復帰の意向や地域での社会活動の参加等も把握し、自宅に帰られた方もおられる。カンファレンスでご本人の心身状況やできそうなこと、要望等を共有し、「介護サマリー兼アセスメントシート」と「ケアチェック表」に記録している。感染対策を行いながら「家に帰って両親の仏壇にお参りする」と言う要望を計画したり、家族が経営する飲食店で食事することもできた。買物や散歩を継続して行えるよう介護計画に盛り込まれている。	①今後も「介助理由」「できそうなこと」「要望」等をケアチェック表の右下に増やし、介護計画の2表(ニーズ・目標など)に繋げていき、日々の実践者として「ご本人」と言う表現を増やしていく予定である。 ②現在、アセスメント書類が複数存在しており、今後も必要な書類の整理を行い、保管場所などの検討を行っていく予定である。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、個別記録を記入し職員全員で情報共有を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者様のご主人が亡くなられた際、弔問客が少ない時間にお参りに出かけることができた。ご本人もその場では理解され、ご家族も大変喜ばれていた。コロナ禍ではあったが、最後のお別れをして頂いて良かったと思っている。		
自己	外部		自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	協力医療機関や調剤薬局、駐在所などの協働はできているが、コロナ禍ということもあり、不十分だと感じる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者様は入居前から施設のかかりつけ医に受診されていた方が多い。かかりつけ医の理解の元、スムーズな医療体制を構築できている。	協力医療機関と24時間体制で連携ができ、体調変化時は適宜指示を下さり、必要時は往診して下さる。協力医療機関の理学療法士や言語聴覚士、歯科医院(2か所)、訪問看護師との連携もあり、リハビリや食事形態などのアドバイスを頂き、介護計画に盛り込まれている。ホームの准看護師(介護職で勤務)も抜針等を担って下さる。今後も職員の医療知識を増やし、日々のケアや医師への報告に活かしていく予定である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職の中に准看護師の資格保有者がおり、日常的な医療ケアを担っている。週1回かかりつけ医の訪問看護も行われており、施設からの相談に対する助言もいただいている。		

32		<p>○入退院時の医療機関との協働</p> <p>利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。</p>	<p>入院時の申し送りから、入院中の状態、退院に向けての調整など、入院先医療機関との連絡を密に行い、ほとんどの方は1ヶ月以内に退院できている。</p>		
33	(12)	<p>○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援</p> <p>重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる</p>	<p>重度化した場合に施設でできることや、現在のご本人の状態、今後考えられることなどをご家族に分かりやすく説明するよう心掛けている。また、ご家族が話やすい環境づくりを行っている。</p>	<p>医療行為が必要でない限り、ホームでの支援が可能である事を伝えている。緊急時の対応も医療機関や家族と話し合い、夜間帯のケア等に活かしている。「最期までホームで過ごしたい」と希望する方ばかりで、コロナ以前は終末期に家族も宿泊されていた。コロナ禍も家族と過ごせる時間が作られ、家族もプリン等を持ってきて下さった。主治医と24時間連携し、必要時は往診を受けられ、最期まで誠心誠意のケアが行われている。</p>	
34		<p>○急変や事故発生時の備え</p> <p>利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている</p>	<p>消防署の救命救急の講習を受け、定期的に初期対応の勉強会を行っている。</p>		
35	(13)	<p>○災害対策</p> <p>火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている また、火災等を未然に防ぐための対策をしている</p>	<p>年に2回の消防訓練、年1回の水災害避難訓練を行い、災害に備えている。また、月に2回コンセントの見回りを行っている。朝の申し送り時に防災テストを1日1問ずつ行い、日常的に防災意識を高める取り組みを行っている。</p>	<p>コロナ禍も1階のデイ(別系列)と協力し、避難訓練を行っている。駐在所の方や民生委員に災害時の避難の協力をお願いし、水害時等のマニュアルも作成し、第一避難場所である小学校への避難訓練も行われた。コロナ以前は出初式の日消防団がホームで放水して下さったり、図面も渡している。豪雨時は小学校と情報交換したり、市役所から代表に川の増水状況等の連絡を下さっている。第二避難所は2階のホームであり、食料は3日分準備し、貯水もあり、浄化水として使用できる。社長は日本各地の施設と災害ネットワークを作り、コロナ禍等における支援も続けている。代表が主になり法人でBCP(災害時の事業継続計画)を作成中で、各事業所で災害時のマニュアルを作成し、法人全体での取りまとめを行っている。</p>	

自己	外部	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご本人を否定せず、制限しない言葉かけをするようにしている。常に「自分が言われたらどう思うか」を頭においてケアを行う様心掛けている。	「親しき仲にも礼儀あり」の気持ちで接するように努め、居室に入る際の声かけや入居者の方々の前で申し送りをしない等、プライバシーの配慮に努めている。入居者個々の喜怒哀楽に寄り添うと共に、社長からのアドバイスも頂き、行動の背景にある心理や原因を分析し、共感に繋げている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者様が遠慮することなく職員に話ができるような雰囲気づくりを行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたか、希望にそって支援している	職員主体ではなく、入居者様主体でケアを行う様心掛けている。一つひとつのことに対し、選択肢は入居者様にあることを忘れないようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	更衣の際には衣類を選んでいただいたり、女性にはマニキュアを塗ってオシャレを楽しまれている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者様の能力に応じて、調理や片づけなどをしていただいている。	朝は宅食を利用し、昼食と夕食は手作りしている。家庭菜園(プランター)でミニトマトや九条ネギ、ジャガイモ等を入居者の方が育てており、包丁でジャガイモ等の皮むきをして下さる方もおられる。味見や下膳、食器拭き、テーブル拭き等もして下さり、干し柿作りも楽しまれ、コロナ以前は鍋パーティ等もされていた。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	入居者様一人ひとりに合わせた食形態で提供している。また、水分摂取をこまめに行い、脱水症の予防に心掛けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、それぞれに合わせた口腔ケアを行っている。		

自己	外部	自己評価		外部評価	
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者様の排泄パターンを把握し、声掛けやトイレ誘導を行っている。	排泄が自立している方もおられる。ご本人のしぐさや排泄チェック表を活用し、個別誘導を行うことで失禁が減った方や、退院時にオムツ使用の方が、トイレで排泄できるようになった方もおられる。職員同士でパッドの大きさを検討し、ご本人のペースに合わせたケアが行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	朝食前に牛乳を提供したり、昼食時にヨーグルトを提供するなど、便秘の解消に心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入って頂く曜日などは特に決めていない。その時の状況やご本人の「入りたい」という希望に合わせてできるだけ対応している。	「お風呂が一番楽しい」と言われる方もおられる。お風呂嫌いににならないよう世間話を楽しみ、事故予防にも留意して2人介助や同性介助も行われている。入浴時は職員との会話や、柚子湯や夏みかん湯、薬湯(入浴剤)なども楽しまれている。入浴が自立の方は遠目の見守り等を行い、手が届かないところの介助を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	全ての入居者様に自由にさせていただいているため、昼寝をする方がいらついたり、就寝時間や起床時間も一人ひとり違う。居室の温度も一人ひとり調整して快適に眠れるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	2週間に1度の定期処方時にかかりつけ医に状態報告を行い、処方の調整をさせていただいている。服薬時は複数の職員で確認し、誤薬がないようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	昔、陶器の絵付けをされていた方に塗り絵をしていただいたり、経理の仕事をしていただいた方はお札(本物ではありません)を数えていただくなどしている。		

49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご本人やご家族の望みを伺い、感染症対策に留意しながら、個別の外出支援を行っている。	ベランダで日向ぼっこをされている。病院受診時に駐車場の桜の花見をしたり、近所の川に放流されている錦鯉を眺める時もあり、良き気分転換となっている。感染対策をしながら職員と一緒に自宅に行かれたり、ご主人の葬儀に家族と参列された方もおられる。家族が経営する飲食店を貸し切り、家族4世代で集い(家族の方はPCR検査済み)、食事を楽しまれた方もおられる。コロナ前は西海橋公園でのピクニック、ショッピングセンター(イオン)に靴などの買物に行かれたり、本部のマイクロバスを利用し、川棚ジャク園への外出・足湯行事等を楽しまれていた。	
自己	外部		自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族の許可がある方にはお財布や少額の現金を所持していただき、外出の際に買い物をしていただくなどの支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持たれている方がいらっしや、直接ご家族とお電話をされている。また、手紙を書いて頂いたり、施設からお電話をしてお話していただくこともある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	フロア内は明るく、開放的な雰囲気になっている。季節の花や手作りの装飾品を飾り、楽しんで頂いている。	フロアと台所が一体化しており、床は滑りにくく、柔らかい素材が使われ、転倒時の衝撃を和らげている。ソファや畳のコーナーもあり、季節の花や季節の飾りつけをされている。1つのユニットはテレビの前にソファを移動し、皆さんがテレビを見やすいように工夫したり、テーブルをリビングの左右両端に配置し、分かれて食事をされている。畳に横たわったり、新聞を読まれる方もおられ、水槽の金魚に餌をあげて楽しめる方もおられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロア内にテーブル席、ソファ、畳席を準備し、それぞれ好きな場所で過ごしていただけるよう工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族の位牌や遺影を飾ったり、使い慣れた家具を持ち込まれたりして、居室内で心地よく過ごせるよう工夫をしている。	2つのユニットとも、リビング周囲に居室がある。居室のドアに大きな名札を貼ったり、入居前のアパートの部屋番号を掲示する方もおられる。位牌や遺影などと共に、寝具(枕や毛布等)、3段ボックス、家具や愛用の小物などを持ち込まれ、家族やご自分の写真も飾られている。職員と一緒にホウキで掃除をしたり、座った状態で掃除をされる方もおられ、今後も更に居室の整理整頓をしていく予定である。	

55		<p>○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり</p> <p>建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している</p>	<p>施設内はバリアフリーで床は緩衝材になっており、安全に移動できるようになっている。また、フロア内は広く、車椅子の方が自走されても十分なスペースが確保されている。</p>		
----	--	---	--	--	--